

武蔵野日曜聖書講筵

十人の乙女

——マタイ伝第24章42節～第25章13節——

1990年10月14日

小池辰雄

一日を一生とする 実は今も天国 霊油 受霊即霊現 無尽の油 歴史的な存在の意味 工ホ
 巴の日 キリストの預言

【マタイ24】

42 されば目を覚しおれ、汝らの主のきたるは、何れの日なるかを知らざればなり。43 汝等これを知れ、家主もし盗人いずれの時きたるかを知らば、目をさまして居て、その家を穿たすまじ。44 この故に汝らも備えおれ、人の子は思わぬ時に来ればなり。45 主人が時に及びて食物を与えさする為に、家の者のうえに立てたる忠実にして慧き僕は誰なるか。46 主人のきたる時かく為し居るを見らるる僕は幸福なり。47 誠に汝らに告ぐ、主人すべての所有を彼に掌とらすべし。48 若しその僕、悪しくして心のうちに主人は遅しと思いて、49 その同輩を打きはじめ、酒徒らと飲食を共にせば、50 その僕の主人おもわぬ日しらぬ時に来りて、51 之を烈しく笞ち、その報を偽善者と同じうせん。其処にて哀哭・切齒することあらん。

【マタイ25】

1 このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。2 その中の五人は愚にして五人は慧し。3 愚なる者は燈火をとりて油を携えず、4 慧きものは油を器に入れて燈火をともに携えたり。5 新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。6 夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼ぶる声す。7 ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、8 愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」9 慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ売るものに行き去りて己がために買え」10 彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉されたり。11 その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いに、12 答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。13 されば目を覚しおれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。



●一日を一生とする

我々の人生も、今読んだように、今日何が起きるか、明日何が起きるかわからない。あの人がもう死んでしまったかとかね。交通事故にあってしまったとか。いろいろな事が突然やってくるわけです。こないだも、私の同僚で学長していたのが、

「小池さんとSさんは百歳まで生きそうなんだ」

なんてなことを時々言われる同僚なんですけれども、それがこないだ突然死んでしまったものだから、交通事故かとみんな思ったわけですね。ところが、普段、自動車に乗っている人だものだから、あまり歩くことをしないうでいた。それがあるグループと一緒に10キロ余り山道を歩いた。それで過労ですっかり疲れてしまって、急性肺炎を起こした。それでまもなく仆れてしまった。そういう思わないうことが起きるわけです。

それで、キリストがまた、

「世の終わりも、再臨もいつ来るかわからん」

と言う。人生も、また世界の歴史もどんな変化がくるか分からない。そこで、毎日、その日を——これは内村先生の言葉ですが——

「二日一生」

とする。その日その日を全的に暮らす。そのことが本当の準備なんです。何を準備するといったって、その日その日を100%に自分のすべきことをやっているということ、それが準備です。

みんな「準備」というとすぐ「試験準備」かと思う。試験の準備でも、毎日本当に学んだことをしっかりやれば、試験準備なんか要らないわけだ。

「入学試験も何でも私は何も準備しませんでした」

と言って、入学できる少年青年が、そういうのが最高なんだ。入学試験準備だとか、予備校だとか——外国へいくと、予備校なんてものはありはしない。学校制度がちがうことでもありますけれども——日本くらい、青少年がそういうことのために余計な精力をつかって、終いにはくたびれてしまう。非常な損失ですね、この日本の教育の在り方は。

「君たちはよく勉強する。ゆえに、試験はしない」

と、そういうのが一番本当なんです。私は東大で、

「君たちを信ずるから、私は試験官をやめるから」

と言って、試験場の外へ出て行ったことがある。ちゃんとみんなカンニングなんかしないでやりました。まあ、そんなことをしたのは私だけでしょね。

人はお互いに信愛すれば、それに応えるわけです。

「悪いことをするかな、しょうがないな」

なんていつてやっているのは、いわゆる律法の世界でね、いつまでたっても落ちがあかない。キリストが旧約の律法の世界を乗り越えたのは、その角度の人物だからです。そうすると、



「律法をいい加減にした」

と言つて、ユダヤ教のやつらがキリストをととうと^{はりつけ}磔にする。とんでもないはなしだ。だから、準備は要らない。準備が要らない在り方が本当の準備だと、こういうわけだ。

「よく遊び、よく学べ」

というね。よく遊んだら、今度はよく学ばなければならない。逆だつてかまわないよ。とにかく、一日のうちには必ず、なすべきことをなす。ドイツの諺に、

「明日がある、明日がある、今日ばかりではないと、怠け者はしよつちゅう言つている」

というのがある。明日に延ばしてはいかん。ゲートの詩の中にもそういう言葉があります。それが本当の意味において、

「目を覚ましている」

ということです。

「何が来るだろうか?」

なんていつて警戒しているのが、「目を覚ましている」ということではない。本当に「目を覚ましている」ということは、

「為すべきことをやっている。何が来ても、アーメン・ハレルヤです」

というわけです。なかなか人間はそれができないで、ゴタゴタしているけれども、それならもうキリストの前に平伏して、

「申し訳ありません」

と申すだけです。

●実は今も天国

マタイ伝第25章1節から、

「このとき天国は^{ともしび}燈火を執りて、^{はなむこ}新郎を迎えに出づる^{おとめ}十人の処女に比うべし。

「このとき」というのは、そのような「終末のとき」、いつ来るかわからない「とき」をいう。神の国がやつてくるのを「天国」という。実は今も天国なんです、現在も。ただ、その天国的な生き方をしてないから、天国になつていないだけのはなし。神さまはしよつちゅういらつしやるんだからね。穢土^{えど}即極楽^{ごくらく}というのがそのことです。この罪の世が直ちに天国だと。それを現じていったのが、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ伝のキリストです。天国を現しながら歩いておられた。それがみんなには見えない。

どんなに天気がわるくても、太陽は雲のかなたにいる。太陽の光は雲をとおしてもとにかく昼間はきている。それと同じです。

「雲のかなたに太陽が輝いている」

という。そういう天国です。だから、我々はしよつちゅう天国人なんですよ、本当は。キ



リストと一緒に歩いていれば、これは天国人です。

「そのうちに天国にいけます」

ではないんだ。天国人であれば本当に天国に行ける。地獄人をやっていて、天国へ行こうとしたって、これは無理だ。

天国とは「神・キリストの支配したもうところ」という。この「支配する」という言葉は私はあまり好きではない。神・キリストが現在していらつしやるところです。「現在」という言葉があるね。「現在する」という。動詞と名詞がある。信仰の世界は全部、現在です。「であろう」ではない。「である」という世界。「直説法・現在」です。未来のことも、口語訳聖書で「何々であろう」なんて書かれると、私は嫌になってしまふ。未来のことも、「なり」「である」です。過去もすくいあげて、「である」。みんなこの「である」の世界なんです。預言者の言にも、

「汝を既に贖いたり。故に來たれ」

という。「來たら、贖つてやる」ではない。

「もう、贖つたよ。だから、やつて來なさい」

ということ。みんな恵みは現在に現在している。みんなそれを受けとらないで、そつぽを向いているからね。

聖書の言は一語一語に非常な重みがある。これは意味ではないんだから、現実だから。

「このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。」

ギリシア語では「比べられるであろう」という形になる。ギリシア語や何かはあまりテンス(時称)が詳しく出ているので、おもしろくない。ヘブライ語の方がずっと弾力性がある。ヘブライ語は完了と未完了しかない。現在完了、未来完了、過去完了、どれでもいいんです。しかも、完了はただ時の完了ばかりではなくて、断定してものがすんでいる。それから、未完了も決してただ「であろう」ではなくて、未来のことを未完了で言うから、「である」と訳して一向差し支えない。旧約聖書は、

「こう訳したら、これが一番正確な訳だ」

なんてことは一つもありっこない。弾力性をもっているから。凄いです。だから、日本語であろうと、何語であつてもいいですよ。

「その奥の神の根源語の響きを受けとれ」

としよつちゆう言っているのは、そのことなんです。

「意味ではないぞ。現実をそのまま受けとれ」

と。学問なんていうものは、もうひとつ絶学しなければ、本当の学問も本当は生きない。学問なんていうものは二義的なものなんです。随分、乱暴なことを言うけれども。



● 霊油

それで、

²その中の五人は愚にして五人は慧し。

「愚か」「慧し」といつても、これはいわゆる「馬鹿」とか「利口」とかいう、普通概念とちよつとちがいますけれども。「慧し」は、よくわきまえている。「愚か」は、わきまえない方です。

³愚なる者は燈火をとりて油を携えず、⁴慧きものは油を器に入れて燈火をとにも携えたり。

いったい、イスラエルのこの頃の「燈火」とは何ですか。オリーブの油に火がつくわけです。燈火もオリーブの油が燃えている。「油」はその燃えてないもの。要するに同じものです。「油注がれたる者」という。神の霊をくだすときに、「油を注ぐ」という一つの方式だね。そして、神の霊をそこに降だす。神の霊の一つの徴として油を注ぐ。これは預言者たちです。サムエルはそれをやった。サウロはそれでもって油を注がれて、同時に神の霊がきて、

「何でも手当たり次第やってよろしい」

と言われた。神の霊で手当たり次第にやってみてよかつたけれども、霊の世界はこわいからね、別な霊と切り替わることがある。それから、サウロはおかしくなった。ダビデを一生懸命でやつつけようと思った。

それから、女の方の化粧にも油をつかう。飲み物にもなる。橄欖の、オリーブの油というものは非常に大事なものだ。

「燈火の油」は——「油注がれたる者」が「神の霊を注がれた者」という。聖霊のバプテスマです——正に霊油なんだ。霊の徴をもった油。霊に例えられるわけです。

「油注がれてあるから、人が教える必要がない。みんな聖霊がお前たちに知らせる」

とヨハネの書簡の中にもあるね。

「聖霊が来たら、私のやつたり言ったりしたことが全部わかるぞ」

とキリストも言われた。

愚かなる方もとにかく、油から火が灯っていた。これは本当は聖霊の火なんだ、聖霊の火の象徴だ。我々は聖霊を持っていれば、この燈火は消えない。聖霊があれば、人生のどんな嵐にぶつかっても、この燈火は消えない。いろいろなことのでつくわせば、逆に力がくる。私は正直、ありがたくて楽でしようがない。

「何でもきなさい、どんなことでも起こりなさい。逆に力がきますよ」

と。反比例する。あまり順調だと、かえってダメだよな。私は

「今日はどうもしょうがない」

なんて思ったことがないものな。生まれつきの私だったら、とてもそんなわけにはいかな



かったです、泣き虫の弱虫でね。

●受霊即霊現

⁵新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。⁶夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼ばれる声す。

「やよ」というのは「視よ」ということ。ピラトがキリストを指して言った言葉で、「視よ、この人」というのは「視よ、この人を」ではない。「視よ、この人だ」ということです。

⁷ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、⁸愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」⁹慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ売るものに往きて己がために買え」

ここに「恐らくは……」なんて訳してあるが、ギリシア語の言い方では

「断じてだめだ、絶対にだめだ」

という強い言い方をしている。「とても貸してなんかあげられませんよ」というわけだ。

¹⁰彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉されたり。¹¹その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いに、¹²答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。

「我は汝らを知らず」

とは強い言葉だね。本当にそのとおり書いてある。「知らない」というのは、知ってはいるんですよ、知ってはいるけれども、

「もう関わりなし」

ということ。キリストに「関わりなし」なんて言われたら、もうこれはおしまいだよな。関係が切れてしまったら。そういうわけだから、

¹³されば目を覚しおれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。

キリストが、新郎が花嫁にやって来るときは、再臨のときは、世の終りはいつだかわからない。だから、「目を覚ましおれ」と。しっかりと警戒しろではない。さつきから申し上げているとおり。「しっかりと準備せよ」ということは、

「為すべきことをしっかりとやっている。それが本当の準備なんだ。一日を悔いなく生きろ。そうすれば、いつ何が起きてもアーメン・ハレルヤだ」

ということですよ。

「油」も「燈火」も、両方とも聖霊の徴ですが、特に「油を持っている」ということはどういうことかというのと、祈りによって実存していること。聖霊のはらたきを本当に活かしていること。



「聖霊が来た」

と言つていい気になつたらダメだということ。聖霊は必ず働く霊ですから人に作用する。受霊、即、霊現ということ。受霊、霊を受けとる。バプテスマを受けると即、霊現。霊が現れる。現ずる。体現するわけです。霊が体現する。それは受霊すると、勉強している青年は勉強がすぐそれで動きだす。御霊の力でもってそれをやっていく。結果がどうなつたつていいよ。心配いらぬ。御霊の祈りなくしてはそんな仕事はできない。御霊の祈りは深い愛です。この「慧き者」というのは祈りによつて霊現をやる。その蓄えというのはいさよ、意味です。しつかり為すべきことをなしているわけだ。片一方は為すべきことをしてない。

「燈火が灯つた。聖霊が来た」

なんて言つたつて、そんな聖霊は逃げていつてしまふ。だから、燈火が消えてしまふんだよ。体現していないと、燈火は消えてしまふ。実存していないと、聖霊がどこかへ行つてしまふ。

「今日も、明日も、次の日も、我は進み行く。父とともに働くなり」

とキリストが言われる。せざるを得ない。

私が今日、特にここを皆さんと学びたいと思つたのは、御霊の働きが、あなた方はただお留守にしていたらダメだということ。十二召団はそれぞれの召団の特色と、また召団の一人ひとりがそれぞれの特色をもつて動いてください。ただ蓄えているのではない。動いていると、これは無尽なんです。

●無尽の油

『聖書は大ドラマなり』（小池辰雄著作集第十巻）の「3月17日 エリシャの無尽の油」（王下2：19～4：7）のところ。ちよつと読んでみます。

「往つてその油を売つて、その負債をつぐのい、貴女とあなたのお子達はその

余分で生活しなさい」（王下4：7）

「……エリシャの門弟の一人が死んだ。するとその婦人がエリシャに、債主が自分の二人の子供を奴僕にひきとろうとしていて、といつて救を求めた。そこで彼は、家の中に何があるかと尋ねた。彼女は僅かばかりの油だけですと答える。では空の器を隣近所からたくさん借りて来て、家に子らと閉じこもり、それらの器に油を少量づつ滴らしなさい、と彼は告げた。この言に従つて油を滴らしたら、見よ、すべての器に油が満々と溢れた！ 驚き喜んで、女はこの神の人に告げた。するとエリシャは右掲の如く語つた。キリストの力ナの婚宴のときの神の愛の力を連想せざるを得ない。橄欖の油は聖霊の徴である。我らも聖霊を体受すると無尽の事態が体現するのである。」

ちやんと同じようなことを言っている。エリシャという預言者は大変なもんです。ある意味ではエリヤ以上です。ちよつと滴らしたところが、油が空つぽの器にたくさん満ちてしまつた。それで債権主に借金を返して、後はそれで子どもたちと生活した。無尽の油という。



尽きざる油。これはエリシヤに働いた神の霊の力です。こんな記事は普通は信じませんよ。ところが、我々が頭で判断して、分かるの分からないのということではない。私はバカだから、全部このまま受けとっている。聖書の現実を受けとっていくと、正直、力がくるからありがたい。仏教の世界でも超一流の坊さんたちは凄い。それはもう凄いことが起きているから。

● 歴史的な存在の意味

これはやっぱり、自分が棄身になっているところの霊の世界というものはもの凄いから。自分で驚くようなことが起きるよ、あなた方。加減してはダメだよ。キリストにゼロにされてごらんよ。そうしたら、無限大になるから。もう既に十字架でゼロにされているんだ。十字架を何だと思っているのか。十字架というのは、「我」というものにこだわっている世界からすつ飛ばしてしまっているんだ。そうしたらもう、無限にはたらいっていきます。その気合を魂で受けとらなければ。いわゆる論理の世界ではないですよ。そういうこと分かってる素晴らしいひとは柳宗悦だ。柳宗悦の書いているものは凄いよ。

我々、この十二の召団の人たちはその気合で生きなかつたら、歴史的な存在の意味がなくなってしまう。いわゆる教会や、いわゆる無教会に何と言われようと、そんなことは問題ではありません。次元がちがうんです。いいですね。

聖霊の世界は、もう聖霊と代えられるものは何ものもない。私はもうあと10年か何年かたったら、向こう側に行かなければならない。私は本が好きだから、本を持って行きたいけれども、しょうがない。天国で本を読むわけにいかない。身体についていなければ。

大事なこういう本はみんな図書館や何かに寄付してしまうよ。この聖書はマルチン・ルターの初版ものだ、大変なものだ。これは私の持っている一番大事な本だ。1534年版の本のそのままの、ルターの初版のそのままの写真版でね、全然まちがいがありません。これは宝なんだけれども、宝は天国に持って行けない。みんな置いてゆく。聖書も置いていかなければならない。一緒に焼いたつてしょうがないからね、欲しい人に上げるよ。

聖書も置いてゆく。だから、自分自身が聖書にならなければ。大ドラマになつてゆかなくて。私は葬式も墓も何も要らんとおっしゃっているでしょ。こないだの詩に書いた。お葬式も墓も要らないから簡単でいいよと。まあ、まるで七面倒臭いことをやっているからね、一般のひとは。何やっているかと。ただ、

「あなた方はバトンタッチして、福音を伝えてくれ。それが私に対する葬式だ」と、それだけののはなしです。

五人だつて、十人だつて、何人だつてかわらないけれども、要するに、本当に聖霊という油をただ持っているばかりではなくて、活用して動かしていること。自分の仕事に、何をやっていても、それが聖霊の働きで展開しますから。医療をやつてようが、お台所をやつていようが、学問をやつていようが、塾を開いていようが、何であろうと。その働きが準



備だということですよ。

「キリストが——世の終りが——いつ、いらつしゃつても結構でございます、世界がどんなにひっくり返ったって」

と。これが本当に天国人の在り方です。我々はそのような天国人として歩くことが天国を迎える最大の準備である、本当の準備である。

「聖国を来たらせたまえ」

というのは、聖国が来て、

「キリストと一緒に聖国を現じています」

ということですよ。人間だから100%にはいきませんよ。100%にいかなくても、それが何%だろうと——たとえば、5%であっても、他の95%に負けない5%なんです。数学とちがうんです。そういう生き方をしないとね。99%がマイナスでも、一つの1%は無限の強さをもった1%だ。これが99のマイナスをひっくり返す。それがキリストの力なんです。いいね。そういう生き方をしてくださいよ。いわゆる数学的な計算なんか要らんから。そうしたら、失敗しようが、成功しようが、そんなものはどっちだって構いやしない。どしどし進んで行けばいい。もう、私は異言が出そうで困る。

●エホバの日

少し預言者の方を参考にみることにしよう。

「その日」「その時」

とか、今、キリストの言葉にもあった。アモス書5章18節に、

「18 エホバの日を望む者は、禍わざわいなるかな、汝ら何とてエホバの日を望むや。是これは昏くらくして光なし。

凄いことが書いてあるね。

19 人獅子ししの前を逃れて熊に遇あい又家にいりてその手を壁に付けて蛇かまに咬かるるにもさも似たり。20 エホバの日は昏くらくして光なく暗やみにして輝きらきなぎに非あずや」

(アモス5・18～20)

預言者の表現は凄いね。どうしてこんなことをアモスが言ったかというのと、

「お前たちの実存はなつちよらん。お前たちの暮らし方はなつちよらん。社会は乱れているし、神さまから離れていて、そんなのが神さまの日を望んで、幸いがるかと思つたら、とんでもない間違いだぞ」

と、そういうことなんです。

「本当の備えをしてないでいて、待っていたってダメだぞ」

と、こういうことだ。大体、「その日を待ち望む」のは、非常に輝かしいことが書いてあるのが多いんだけど、アモスは、



「ダメだ。神さまの義から離れてしまっていて、とんでもない」と。だから、5章24節に、

「²⁴公道を水のごとくに正義をつきぎる河のごとくに流れしめよ」(アモス5・24)

とある。これはアモス書の有名な言葉だ。私はこの「正義」という言い方はあまり好きではないけれども、ところが、最後に、アモス書9章11節に、

「¹¹其日には我ダビデの倒れたる幕屋を興し、その破壊を修繕い、そのくずれたるを興し古代の日のごとくに之を建てなおすべし。¹²而して彼らはエドムの遺れる者および我が名をもて称えらるる一切の民を獲ん。この事を行うエホバかく言うなり」(アモス9・11・12)

とある。ここのは非常に面白い希望のことが書いてある。ということとは、

「お前たちが本当に神に立ち帰れば」

という前提のもとに、ということなんです。こんなことを書くので、「これはアモスではなくて、他のやつが書いたんだ」なんて、すぐそういうことを言うけれども、私はこれはやっぱりアモスだと思う。

「¹皆さん、神の義に背いてけしからん」といつて、

「その日を待ち望め。けれども、もし立ち帰ればこうなるぞ」

という、最後の望みを言っているわけです。9章の前半のところでは、

「お前たちがどんなことをしたって、みんなこれはダメだ」

と言っておいてですね、非常なコントラストをなしている。

●キリストの預言

旧約の預言書を読んでごらん。おもしろいから。ミカ書5章2節に、

「²ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小きき者なり。然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我がために出づべし。

キリストの預言です。

その出づる事は古昔より永遠の日よりなり。³是故に産婦の産みおとすまで彼等を付しおきたまわん。然る後その遺れる兄弟イスラエルの子孫とともに帰るべし。

「遺れる者」という。本当にキリストに在って生きている者はこの預言者がいうところの「遺れる者」です。あなた方がこの「遺れる者」です。

⁴彼はエホバの力に由りその神エホバの名の威光によりて立ちて、その群を牧い之をして安然に居らしめん。今彼は大なる者となりて地の極にまでおよ



ばん」(ミカ5:2〜4)

これはキリストの預言です。凄い言葉ですね。何といつても、ユダヤ人というのは選別の民だよな。頑くなでしようがないところもあるけれども。

旧約聖書の一巻終りを見てごらん。マラキ書4章。

「一万軍のエホバいいたもう、視よ炉のごとくに焼くる日來らん。すべて驕慢者とお悪をおこなう者は藁のごとくにならん。そのきたらんとする日彼等を焼きつくして根も枝ものこらざらしめん。されど我名をおそるる汝らには義の日にでて昇らん。その翼には醫す能をそなえん。汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん。」(マラキ4:1〜2)

キリストは正に「義の日」です。神の唯だ一人の義人だからね。

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言ったとおりです。神さまの御意を100%に行うひとを「義人」という。いわゆる「正義」とかいうことではない。

その義が今度は、ひとに向かって横に流れるときに、これは愛となる。義と愛は一つなんです。それはマルチン・ルターが『クリスチャンの自由』の最後にそのことを別な表現で言っている。

まあ、聖書くらい面白い本はないよ。大ドラマです、本当に。最大のドラマです。日本に大文学が出ないのは結局、この大きな神の世界、絶対者との交わりを持たないからだ。フランスのユゴーであろうと、ドイツのゲーテであろうと、イタリアのダンテであろうと、ロシアのドストエフスキー、トルストイであろうと、みんなそうです。

それはもう、祈らざるを得ない。祈らなければ、力がこないですから。祈るといのは、ただお願いすることではない。神さまとの、キリストとの交わり、をすることです。しかも、キリストの中に自分を投げ入れる、ことです。

「主さまー」

と言え、もう直ちに投げ入れる。そこから始まる。それからもう、十字架でもってすつ飛ばされているから、キリストは

「遠慮なく来なさい」

と仰る。何も遠慮なく。人にどう扱われようと、どう言われようと、そんなことは構やしないから。

「十字架と聖霊は絶対に離すことができない」

と、その現実でもっていいよいよ力強く進んでください。そうしたら、あなた方がやることに非常に創造的な力が出てきます。智慧も力も。もう表現できない。それでは終わります。

